

KALS NEWSLETTER 60

2019年12月

九州アメリカ文学会

事務局 九州大学大学院言語文化研究院内

福岡市西区元岡 744

〒819-0395

『マクティーン』と裁判

九州大学 高野 泰志

今年の9月、幻戯書房よりフランク・ノリスの『マクティーン』を翻訳出版しました。この作品はアメリカ文学の中で私のもっとも好きな作品のひとつで、長年翻訳したいと思い続けてきたので、ついに念願がかなって非常にうれしく思っておりました。当時のサンフランシスコの町が細部に至るまで描き出されており、自分では行ったことのないこの町の古地図（1906年のサンフランシスコ大地震以前のもの）を見つけてきては細かい場所を特定するという作業はなかなか大変なものではありましたが、改めて作品理解が深まり、楽しい作業でもありました。

ちょうど1年前の10月に翻訳を始め、ほぼ週末を徹夜で作業しながら3月に脱稿、その後は注釈や細かい事実のチェック、校正などを行いながら1年未満での出版ということで、初めての翻訳にしてはなかなかのスピードであったのではないかと思います。その分うっかり見逃した間違いなどが後から見つかるのではないかとびくびくしているところです。

この大変な作業が終わってちょっと一息つこうと思っていた矢先、裁判所から大きな封筒が届きました。何事かと思ったら裁判員の選任手続きに来るようにとのこと、理由なく欠席すると科料に処せられるなどという恐ろしい文言が書かれてあります。行ってみると当日集められたのはおよそ40人弱の候補者で、この中から補充裁判員を含めて10人が選ばれるということで、まだまだ当たらない可能性の方が高いと思っていたところ、見事に「裁判員4番」を拝命してしまいました。裁判員裁判の平均日数はおおよそ5日程度だそうですが、私が当たった裁判は1カ月半にわたって続く難しい審理でした。

裁判員に選ばれる確率はおおよそ13500分の1らしいですが、結構な確率に当たったということで、後で宝くじを買ってみる人も多いのだとか。あまり宝くじを買う気になれないのは、『マクティーン』を翻訳したばかりだからということもあるでしょう。ご存知のようにこの作品は、最初は善良な夫婦が、宝くじで5000ドル（現在でおおよそ1500万円ほど）を当てたばかりに、坂道を転がるようにして転落していき、陰惨な殺人事件にまでいたる物語ですから。

『マクティーン』は 1893 年に実際に起こった殺人事件をもとにしていますが、この宝くじの当選というプロットはノリスの創作で、実際の事件はパトリック・コリンズという男が小遣いを渡さない妻を 30 回以上にわたってナイフで切りつけた凶悪な事件でした。当時の新聞記事を読む限りでは、コリンズという男は飲んだくれで 2 人の子供の面倒を見ることもなく、たびたび妻に暴力をふるうという、まったく同情に値するような男ではなかったようです。ノリスはこの事件を子どもの存在を消去し、犯人をもとは善良な人物に設定しました。また被害者を始め、周囲の人間も奇怪な人物に仕立て上げることで、たんに凶悪な犯人が善良な被害者を殺害したという白黒ははっきりした事件とはかけ離れることになったのです。

さて、裁判員として法廷で審理を聞くことになったわけですが、裁かれる事件は表面上だけを見るとこのコリンズ殺人事件と似ていなくもない事件であり、タイミング的に妙な符号を感じてしまいました。事件については詳しく書きませんが、全国的に大きく報道されていたこともあり、どの事件のことか推測できるかもしれません。ただ実際の審理を聞いていると新聞報道とはかなり違った印象を受けることも事実で、パトリック・コリンズの事件も果たして実像はどうだったのだろうと思わされました。当時の新聞は今我々が読むような記事よりもはるかに扇情的に読者を煽り立てており、実際コリンズやその妻がどのような人物であったのかを推測するのは難しいのではないかと思います。

一方で虚構の人物であるマクティーンは、小説的肉付けをされているせいか、凶悪な犯罪を行う人物でありながら、新聞記事のコリンズよりはるかに親しみを持てるように思えます。それと関係あるのかどうか、法廷で毎日被告人を見ていると、次第にまるで顔なじみのような気になってきます。あらゆる証拠が被告人を犯人と名指す中、本当は別の犯人のいる別の物語が隠れているのではないか、あるいはそうでなくてもこの人にもマクティーンのような事情があったのだろうか、などなど私の中では『マクティーン』と裁判とが交互に行きかうようになります。

そんなことを考えているうちに、いったい裁判と文学解釈とは何が違うのだろうという疑問がふと湧き上がってきました。どちらも表面上描き出された物語の背後にどのような文脈、どのような先入観が潜んでいるのかを探り、信頼できない語り手の背後にある物語を構築していくこととなります。文学解釈においてはもちろん正解はなく、どの読みがもっとも説得力を持つかですべてが決まりますが、裁判においてもやはり絶対的な真実に到達することはできず、ただ検察側の語る物語に説得力があるかどうかを読み手である我々が決定することになるのです。ただ決定的に違うのは、主人公たる被告人の人生、そして生命が我々の読みにかかっているという点だけです。

そういう意味で、他人の命をかけた読みを経験したことは、それがよかったのか悪かったのかはわかりませんが、今後の私の作品解釈に対する姿勢に大きな影響を与えそうだと思います。慄然とした気分になったのでした。

日本英文学会第 72 回九州支部大会「アメリカ文学部門シンポジウム」報告

長崎大学 鈴木 章能

アメリカで 1920 年に女性参政権（憲法修正第十九条）が承認されて 100 年を迎えようとしている。そこで、「女性と文学を政治と法から考える——アメリカ女性参政権承認から 100 年を期に」と題するシンポジウムを行った。シンポジウムには、中部支部から招聘した名古屋女子大学の羽澄直子氏、KALS の会員でもある明治学院大学の森あおい氏、琉球大学の喜納育江氏、ならびに鈴木が登壇した。

女性参政権の承認以降、いやそれ以前から、平等な社会の実現のために様々な運動や闘いが展開され、女性の政治進出や法の整備が進められてきた。一方で、その過程において取りこぼされてきた課題もある。筆をとることは、そうした法や政治の取りこぼしと密接な繋がりがあると考える。女性が政治に進出し女性の法が整えられる過程で何が取りこぼされ、文学はどう関わってきたのか。そして、文学が周縁化されているいま、新たな女性の問題に対して、文学はどのような役割を担えるのか。こうした問いを基に、本シンポジウムでは、文学について女性を巡る法や政治という文脈から、あるいは女性を巡る法や政治について文学から、再読や考察を行った。

まず鈴木は、参政権が女性の戦争参加を条件に承認されたという事実から 20 年代の文学を再考し、以降、女性の闘いと資本主義の観点から取りこぼされてきた課題と文学（作品および批評）の関わりを現代まで概観し、性差と社会的・政治的構造の産物たる二重労働市場が維持されているグローバル経済下の女性差別と文学のマイノリティ化の要因は同じものであること、女性労働市場の仲間となった文学(者)が連帯して社会全体を俯瞰し、議論ならびに男性労働市場への異議申し立てを続けることが新たな女性の連帯になると論じた。続いて羽澄氏は、参政権承認後 100 年たった今もなお女性にはガラスの天井が存在し、政治的権利が保証されているとは言い難く、19 世紀後半の女性参政権獲得運動に浴びせられた反フェミニズムの言説がいまだ燻っていることにその要因があろうという観点から、女性参政権が嫌悪され拒絶される過程について当時の反フェミニズム小説を通して考察した。森氏は、フェミニズム運動の歴史とアフリカ系アメリカ人の関わりを俯瞰したうえで、アメリカの法制度から取りこぼされ社会の周縁に追いやれている人々の存在に光を当てて文学・文化の力によって彼(女)たちの主体性を回復しようと、差異を超越した連帯の可能性を模索したトニ・モリスンの手法を検証した。最後に、喜納氏は、フアレスでの連続女性暴行殺害事件の犠牲者の多くがグローバル企業の工場で働く、貧困層出身の若い女性低賃金労働者であることに注目し、法整備が進んでなお権利を保障する法律を勝ち取ることが困難な女性が存在するという 21 世紀のアメリカの現実とそうした女性を生み出すシステムについて、豊富な写真とともにアリシア・ギヤスパー・デ・アルバの小説 *Desert Blood: The Juárez Murders* から考察した。

以上のように、時代ならびに人種・民族を考慮しながら、女性・文学・政治・法について考察してみたが、法は州によって異なり、また専ら小説を扱ったため、まさに「取りこぼし」が多々生じたかと思う。とはいえ、法と現実のギャップを埋めるのが文学であるという立場から文学の果たしてきた役割、ならびに今後の課題について考察した今回の

シンポジウムが、いまなお山積する女性の問題を巡る、さらなる議論に発展していけばと願っている。フェミニズムとは行為実践による現実化の過程であり、そのためには議論をとめないことが重要であるのだから。

最後に、会場に足を運んで下さった皆様、会場の準備をして下さった熊本県立大学の皆様、今回の勉強の機会を与えて下さった佐賀大学の早瀬博範先生、そして「連帯」によってシンポジウムを無事終えることができた三人の先生方に厚く御礼申し上げたい。

九州ホーソン研究会：ワーク・ショップ

北九州市立大学名誉教授 乗口 眞一郎

今回のワーク・ショップは2つの理由で、私が司会進行を担当しました。1つは、この会は、元宮崎大学教授、故大杉博昭氏と熊本学園大学教授の向井久美子さんと私の3名で始めた会ですが、最近は活動がやや下火になっていたからです。ワーク・ショップでもやらせて戴き、皆様方との研究会を願った次第です。

もう一つは、2021年の「国際Poe学会」がボストンで会催されますが、既に、この学会で3名の発表者のChairを依頼されていますし、PoeとHawthorneに関して、私にも発表するようにと求められているからです。数回のワーク・ショップを通して、日本における「ポー文学とホーソン文学」への反応を纏めたいと考えています。

今回のワーク・ショップでは、ホーソンの短編、“Wakefield” “Rappaccini's Daughter” “Roger Malvin's Burial”の3編を取り上げ、私がこれらの短編の概要を申し上げ、参考までに各短篇の論点を示し、その後グループに分かれ、20分ほど自由に話し合っただけでした。最後に、グループの代表者がこれら3つの短編で、どれが一番面白いのか、そして、それは何故か等を自由に発表して戴きました。

グループワークの参考論点

“Wakefield”

① Wakefieldの人物分析 ② テーマは？ 社会の組織と個人の責任は？

“Rappaccini's Daughter”

① 「楽園の園」との関連性？ ② “The Birthmark”との類似性？ ③ 医者・研究者の純一無雑な研究態度を、ホーソンは肯定 or 否定？

“Roger Malvin's Burial”

① 2つの隠された罪の意識： Rogerを埋葬せず利己的に行動、Dorcasに偽りの報告 ② RubenのCyrus射殺は、本当に偶然の事故か？ ③ Rubenの我が息子を射殺し、穏やかな祈りを捧げる意味は何か？

(2019年9月28日)

地区だより

<熊本地区>

熊本大学 池田 志郎

熊本地区はアメリカ文学に関心のある市民も巻きこんでの研究会を行っています。専門研究領域を地域に還元するという地域貢献の一環であると同時に、地域にいる英語文学愛好者との交流を持とうという目的からです。いろいろな背景を持った方々がいらっしやいますので、和気あいあいとした楽しい会です。*今回は紙幅の関係で基本情報のみ。

- 第 145 回 (2018 年 11 月 24 日) 熊本大学にて
題目: Cynthia Kadohata の *The Floating World* における娘の成長と家族
発表者: 楠元実子 (熊本高専)
司会者: 池田志郎 (熊本大学)
(研究会後に忘年会)
- 第 146 回 (2019 年 2 月 16 日) 熊本大学にて
題目: 『怒りのぶどう』におけるスタインベックの創作過程——母の愛と人間愛
発表者: 馬渡美幸 (熊本大学非常勤)
司会者: 山本幹樹 (熊本大学非常勤)
- 第 147 回 (2019 年 4 月 20 日) 熊本大学にて
題目: Elizabeth Strout 作 *My Name Is Lucy Barton* の構造分析
発表者: 池田志郎 (熊本大学)
司会者: 濱田比呂美 (熊本大学非常勤)
- 第 148 回 (2019 年 7 月 20 日) 熊本大学にて
題目: Louisa May Alcott の *The Inheritance*——観察者の絵図
発表者: 山本幹樹 (熊本大学非常勤)
司会者: 池田志郎 (熊本大学)
- 第 149 回 (2019 年 9 月 21 日) 熊本大学にて
題目: *Where the Crawdads Sing*: なぜ読まれるのか
発表者: 池田志郎 (熊本大学)
司会者: 楠元実子 (熊本高専)
- 第 150 回 (2019 年 11 月 16 日) 熊本大学にて
題目: 原作と映画で考える *Still Alice*
発表者: 池田志郎 (熊本大学)
司会者: 楠元実子 (熊本高専)
(研究会後に早めの忘年会)

<以上>

< 沖縄地区 >

琉球大学 喜納 育江

今年5月に琉球大学で開催された第65回九州アメリカ文学会では大変お世話になりました。山城新、小林正臣、渡久山幸功、そして私の4人の教員に2名の大学院生の脆弱な態勢には不備もありましたが、皆様の温かいご協力を得て無事に終えることができました。年の瀬となりましたが、改めて御礼申し上げます。引き続き来年5月には日本英文学会の年次大会が琉球大学で行われる予定です。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

その後の会員の活動としましては、まず、10月には加瀬保子さんがフルブライト客員研究員としてミネソタ大学で行っていた研修から復帰しました。アメリカでも精力的に研究を進め、昨年の*The Politics of Traumatic Literature: Narrating Human Psyche and Memory* (Cambridge Scholars Publishing) への論文掲載に続き、新著論文 “Guests of Empire, Ghosts of Dispossession: Traumatic Loss and the Subject without a Proper Name in *The Gangster We Are All Looking For*” が*The Journal of Literature and Trauma Studies*に掲載される快挙を達成しました。また、昨年に引き続き、2020年にシアトルでのMLAではラウンドセッションでご発表の予定です。喜納は10月に熊本での九州英文学会のシンポジウム「女性と文学を政治と法から考える～アメリカ女性参政権承認から100年」で、そして11月にはホノルルで行われた米国アメリカ学会で発表しました。また、昨年からは同学会の*American Quarterly*の編集委員に就任し、年4回の編集会議でのレベルの高い議論から刺激を受けています。他の沖縄地区会員も日々の校務に忙殺されつつ必死に研究を続けています。ちなみに、2013年より私が引き受けしてきた沖縄地区委員は、次回より琉球大学の加瀬保子さんに引き継がせていただきます。これまでありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

事務局からのお知らせ

(1) 九州アメリカ文学賞応募

『九州アメリカ文学』60号に詳細がありますように、九州アメリカ文学賞（新人賞）の応募締め切りは2020年2月20日です。応募をお待ちしています。

郵便もしくは電子メールによる応募が可能です。

(i) 郵送の場合

〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学大学院言語文化研究院内
九州アメリカ文学会事務局 岡本太助 宛

(ii) 電子メールの場合

銅堂恵美子（福岡大学）emikododo@fukuoka-u.ac.jp

いずれの場合も、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

(2) 『九州アメリカ文学』投稿

『九州アメリカ文学』60号に記載の投稿規定にありますように、『九州アメリカ文学』

61号への投稿は2020年4月30日(木)締め切りです。こちらにも応募をお待ちしています。
宛先は

〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学大学院言語文化研究院内

九州アメリカ文学会事務局 岡本太助 宛

です。プリントアウト3部を郵送し、封筒には『九州アメリカ文学』応募原稿」と明記してください。

(3) 「九州アメリカ文学会出版助成金」申請

「九州アメリカ文学会出版助成金」への申請締め切りは、規則の変更により、2018年以降2月末日から1月末日に変更になりました。従って、2020年度の締め切りは、2020年1月31日(金)となります。また助成限度額も、従来の300,000円から、100,000円に変更されています。申請の要領は、『九州アメリカ文学』60号をご参照下さい。

(4) 九州アメリカ文学会第65回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第66回大会は、2020年5月9日(土)・10日(日)の両日、九州大学伊都キャンパスにおいて開催されます。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。多くの研究者の積極的なご参加をお願いいたします。

1. 発表者は大学院博士前期課程(修士課程)在学者を含むアメリカ文学研究者。

2. 発表時間は40分(発表30分、質疑応答10分)。

3. 発表は英語でも日本語でも可。

4. 発表希望者はタイトルとレジュメを以下の要領で提出すること。

* レジュメは発表の際に使用する言語で作成すること。

* 英文の場合は300語程度。

* 日本文の場合800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。

* 発表題目の固有名詞(作家名・作品名)は英語とする。

* コンピューターで作成する場合は、Wordを使用し、メールで添付書類として送付するか、ワープロソフト名が明記されたフロッピーディスクに原稿を添えて郵送すること。

* 提出先 メール takano@lit.kyushu-u.ac.jp

郵送先 〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学大学院人文科学研究院 高野泰志研究室

* 締め切りは2020年2月20日(木)(必着)。

* 大会ならびに発表に関するお問い合わせは、高野泰志(tel.092-802-5031/ e-mail: takano@lit.kyushu-u.ac.jp)までお願いします。実りある大会にするために、多くの応募を期待いたします。

(5) 『アメリカ文学研究』, *The Journal of the American Literature Society of Japan* 論文投稿

日本アメリカ文学会発行の『アメリカ文学研究』(和文、英文)への論文投稿希望の方は、直接、本部事務局へ論文を送付してください。原稿送付先住所、締め切り等、詳細は必

ず本部のホームページにてご確認ください。

(6) 日本アメリカ文学会第 59 回全国大会発表者募集

2020 年度日本アメリカ文学会第 59 回全国大会は、2020 年 10 月 3 日（土）・4 日（日）の二日間にわたり、金沢大学にて開催が予定されています。発表を希望される方は、名前、住所、略歴、現在の所属、発表のレジュメを九州アメリカ文学会事務局のメールアドレス（okamoto@flc.kyushu-u.ac.jp）に 3 月 31 日（火）までに電子メールで送付してください。

応募に際しては、以下の点に特に気をつけてください。

(i) 略歴では、連絡用のメールアドレス、6～7 月にかけてゲラを送送する宛先の住所（郵便番号）、現在の所属（常勤か非常勤か）を必ず明記する。

(ii) 発表タイトルに副題をつける場合は、和文は「——」、英文は「:」に統一する。

(iii) 発表レジュメの字数は日本語で 1200 字程度、英文で 400 語程度。

なお、その詳細につきましては、例年学会本部から会員に送られる年賀状に記載されていましたが、2019 年から年賀状は廃止されました。研究発表の投稿規定は、日本アメリカ文学会本部ホームページに掲載されていますので、発表を希望なさる方はそちらをご覧ください。

(7) 会計からのお知らせ

大学等の所属に変更がございましたら、年会費振込用紙にその旨をお書きいただくか、あるいは、KALS 会計(下條恵子：shimojo@flc.kyushu-u.ac.jp)までメールにてお知らせください。よろしく願いいたします。

以上